

地運峯にこゝましまして、
雨模様もひつたりです、

第三話、
家には奥州兵がとまつていて、言葉(方言)がわかりにくく、

西南役の時にも、明治政府が奥州地方で、よかん下兵隊と募集して、
政院島へ薩摩藩へを征伐して、明治元年の仇を討つてやれと意図して、
薩長聯合軍のたし痛い目にはおぼせています。会津藩城、奥羽越前藩降服、立後郭落城まどがとれです。奥羽地方の多くは旧士族が募兵に志し西南の役に従軍しました。事実、奥羽兵が憲法に駐比して、

通空が巡査と改称されたのが、明治八年です、西南の役において、鎮台兵古くは兵力が充分でないので、旧士族の中から巡査を募集しました。こゝから入るが、警部補として出征しました。

当時、東京に警視庁があつて、大警視がその最高責任者でした。豊後方面の指揮官は、三等大警視萩原若貞でした。四坪の招魂所の「東京警視救隊戦死之碑」は、これに関連性があります。

第四、五話には、三河内戦の状況が述べられていますが、この戦闘で、二〇名余りの官軍戦死者がでました。

第六、七話には、中山へ上野田への二つの坂も負傷兵を水に白坪の招魂所について飲んでいます。佐伯病院では、官軍側七名の戦死者がでました。

結論としては、今更なから、多田太郎吉老の記憶力と柴田勝安氏、河野典一氏、柳井雅雄氏、真柴歩氏の研究に感服するばかりです。
古者にお話と聞き、また、足を運んでの研究調査が、いかに大切であるかと痛感させられました。

同時に、西南役戦地事蹟報告書へ佐伯村、上直見村、藤山村、仁田原村、赤木村、北市尾溝、葛原浦、その外、因尾村、赤木村、江尾村、下直見村、海舟村」と読んで、その戦いか、佐伯市、南海部郡の全地域にまたがった大規模なものであつたことと知ることができます。

(ちりり)

古資料

佐伯藩の領域

「豊後国古城蹟並海陸路程」より摘萃

提供 佐 藤 賢 一

◇毛利市三郎 領分

三代高尚、寛永八年生、寛永十年二月襲封、寛文四年八月三日歿、年三十四才

長川院殿法雲宗海大居士

(海)

一 在御城下より北三方、保戸嶋の邊迄、海上七里。此邊之はは淺所、長さ三町、岩岸深く潮干満かまひなく、潮懸り吉。大風なごに船懸り不成。湊の口中西に向、西風悪也。此保戸嶋之邊之沖に、高甲と中難所有、船懸八拾七間有。高甲より沖へ、瀬底老里半有。北之方に、むく嶋と申嶋有、保戸嶋より海上式里、此むく嶋迄、市三郎領分、是より細川殿守領分佐賀領迄五里

(海)

一 鳩浦之邊、保戸嶋分海上式里。此湊の口、長松町、此間に嶋有。湊の比は四町、岸深く、潮干満にかまひなく、船懸り吉。城下より海上八里。此より稲葉無登守領分、長目の邊迄、海上三里。

〔佐伯、臼杵(陸)〕

佐伯城下より、稲葉能登守領分、竹ノ木村(注津久見市警固屋)之堀迄、陸路五里、内式里山鏡山と云坂也。牛馬以かよふ吉。此道筋下小溝川、瀬三瀬有。

〔佐伯、臼杵(陸)〕

大坂本御之内、尺鷹村之道筋、稲葉能登守領分也。千年村之堀迄、城下より五里廿七町。此間に溝川之瀬六瀬有。

〔佐伯、臼杵(陸)〕

同城下より因尾御之道筋、稲葉能登守領分、稀川内村之堀迄六里三拾町。此間に鬼瀬と云川有。広さ六拾町、深さ一尺五寸。其外に溝川之瀬、杵走瀬有。何哉道筋難所。牛馬之通ふ吉有。

〔佐伯、臼杵(陸)〕

同、因尾御之内、堂ノ間より土河屋村迄六拾八町。土河屋より稲葉能登守領分白谷村之堀也。拾八町土河屋より山部村迄老里拾五町。山部村より稲葉能登守領分、出羽村之堀迄拾六町。同山部村より巖村(註、櫻峯)迄拾八町。

(陸)

一、同、因尾御之林堂の間より井ノ内村迄老里。此間に溝川四瀬有。

(陸)

一、城下より大越村迄式里拾五町。此間に溝川八瀬有。

(陸)

一、城下より山口村迄、小道三里拾八町有。此間に溝川八瀬有。

(陸)

一、城下より浦代村迄三里三拾町、牛馬、道宜し。此間に溝川式瀬有。

〔古市、田市打古城〕

古市郷之内田市村(縣市村)に古城跡あり。坂之内三所式拾町。木戸口御方有。小柴山上之場ノ広さ、北南三拾町。西奈式拾五町。南北尾籠也。山之上に水あり。谷に水有。城下より陸路三拾町。佐、田市村(古市村)迄五里。牛馬之通ふ吉。此間に辰ノ川(奇匠川)ノ瀬、広さ四拾町、深さ三尺。其外溝川之瀬五瀬有。

〔佐伯、日向(陸)〕

同城下より南之方向、日向之内、有馬左衛門領分。三川内村之堀迄、陸路四里三拾三町。但二拾三町は山坂難所。牛馬之通ふ吉。此間に舟渡り之川吉瀬有。広さ五町、此外歩渡りハ溝川、七瀬有。

(海)

一、佐伯城下より辰巳之方向、松浦郷之内中村(中浦)之瀬迄海上三里。濶さ五里。長さ拾五町。此瀬、岸深く、潮ハ満干にかまひなく、何風にて不替。船懸り吉。瀬之口亥ノ方向。沖に鳴有。濶さ口より鳴迄之町三町有。

(海)

一、大嶋之瀬、中村(中浦)之瀬より海上三里六町。濶之長さ五町、深さ五町岸深く、潮ハ満干にかまひなく、南懸り吉。濶さ口酉ノ方向。此瀬より巳ノ方に瀬戸有。此瀬戸舟懸り五拾二町。水底には八有。潮早く、波高く難所。沖に水かこと云嶋有。大嶋より海上四里。此水ハ、遠、市三郎領分。是より九州(伊豫)なる、豫州(伊豫)遠達守領分。ふぶり(日振島)ハ崎迄。大嶋分、海上三里。

(海)

一、米水津郷之内、浦代之瀬迄。大嶋分海上三里。此間に鶴御崎と申難所有。日和悪敷、南風に候ハ、上不入船渡暇なし。此浦代ノ瀬、長さ六町、深さ三町、岸深く潮ハ満干かまひなく、何風にて不替。船懸

り吉、淺い口、辰巳に向、城下より海上八里、陸路
三望三拾町。牛馬の通ひなし。

(海)

一、蒲江之由、泊之淺より浦代へ遷途、海上北運。此間
にぎしめきせ^船（芹崎）として難所有。日和慈熒、
南風に而保へば、上下之船藏殿なし。此淺之長と拾

(以下五頁ページ以下)

研究

佐伯の港ほとんどな働きをしてゐるか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯堂南高芽学校

教諭・岡枝郷土誌クラブ 藤岡

本会会員 市野 瀬

仁

(五) 葛 港 (承前)

(その二) 大正時代

大正時代に入ると鉄道の開通があり、葛附近には埋立
也会社や公共施設の建設工事があり、活況を呈するよう
になつた。

「佐伯土地株式会社は資本金百万圓を以て、大正九年四
月より港前の一畝田塩田二万坪余を購入して、十年五月
より埋立工事に着手し、地域を劃して井然たる区別を立
て、又港區にては港正土地株式会社を組織して、数千坪
の地面を買入れ埋立工事に着手せり。」と云つて、大正十
年、佐伯製氷株式会社、十二年の魚市場の設立等、港ら

しい様相を呈するようになった。とくに塩田の埋立
ては、鉄道トネルを掘つた定石や土を利するの
かき分けで成つたと垣之由董氏(葛庄)は述べて下さ
つた。

「大正十一年には大坂線及び細島線の旅客、本港より搭
乗するもの一三、三二八人、上陸する者一五、九八六人、計
二枚、三一四人、是を同年度に於ける本港輸出貨物の価格
(額)は二、九五三、四九九圓、輸入貨物の價格(額)は
二、〇九四、八九〇圓、計五、〇四八、三八九圓に至り、額又
同年度中に於ける入港の船舶は汽船と私船を合せて四、三一
四艘あり」と云つて、汽船で上船、下船する者それそれ
一日に四〇人程度、合せて八十人程度が利用してゐるよ
うである。入港の船舶は明治十五年の開港の蒸汽船、和
船を合せて二七七艘に対し、四〇年後の大正十一年は
四、三一四艘となつて、その増大を示している。大正
三年に勃発した第一次世界大戦、大正七年のシベリア出
兵等、世界も日本の戦争を契機に、政治や経済や産業界
に波が大きく揺れ動いてゐる事情が、葛の港に影響して
きたものと考えてよいであらう。

葛庄之由の吉田茂氏によると、港は出征、入隊で賑
わい、その度に回港店の忙しきはうけしい悲鳴をあげ、
人々の羨望の的であつた。一方陸上では客を待つ人の方車
にトンボ笠をかぶつた車夫の数は、四〇人から五〇人を
数えたということがある。

こうして大正時代の揺れ動く頃、大正五年に日豊線幸崎佐
伯間開通、大正九年に日豊線佐伯津原間開通、大正十一
年に日豊線神奈重間開通と云つて、この地方の便利は
大きく改善されたに違いない。なかでも葛港や日本回漕
店には、陸上輸送機関が一本建設されたことによつて、船
輦と与えたはずである。それは大正九年以降の輸入物価

